

エギディウス・ロマヌス研究の 現状と問題点

柏 木 英 彦

I

エギディウス・ロマヌスは13世紀の70年代から14世紀初頭にかけて思想界においてばかりでなく政治的にもきわめて重要な人物であったにもかかわらず、現在その研究は種々の事情から極く僅かしかなされていない。

今世紀のエギディウス研究は P. Mandonnet⁽¹⁾ によって始められたと言えるが、その後の研究はいずれも、エギディウスをトマスの真の弟子とした Mandonnet 説を訂正する方向にあるようである。すなわちエギディウスの思想における新プラトン派の影響を指摘し、かれを反トミストとして扱うのであるが、この解釈は E. Hocedez に始まる。Hocedez は、In I. Sententiarum, In Liber de causis, Theoremata de esse et essentia 等におけるトマスとの相異点を挙げ、Mandonnet の見解を若干訂正したが、G. Bruni はさらに De plurificatione possibilis intellectus において同様の事実を指摘し、エギディウスは生涯トマスの学説を批判したと述べている。⁽³⁾ J. Koch も Super de generatione et corruptione でエギディウスがトマス説に反対していると述べて、「トマスの真の弟子」という伝説は完全に葬むられたと断じている。⁽⁴⁾ 戦後 P. Nash はさらに積極的にエギディウスが新プラトン派、特にプロクロスの形而上学に支配されていたことを論じ、Mandonnet と全く反対の解釈を展開している。⁽⁵⁾

エギディウス研究のテーマはいずれも Hocedez の示唆に基づいている。まず第一に最も重要なのは esse と essentia の実在的区別に関する問題で

あるが、これについてトマスとの比較、アンリー・ドゥ・ガンとの論争をめぐって E. Hocedez, J. Paulus, P. Nash が論究している⁽⁶⁾。第二に形相多数性に関するエギディウスの立場について S. Makaay, E. Hocedez, R. Zavalloni が論じている⁽⁷⁾。第三に神学の subject についてのエギディウスの見解及びこれをめぐるアンリー・ドゥ・ガン、ゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテースとの論争について P. Nash の研究がある⁽⁸⁾。

エギディウスにおける神学の subject については Hocedez によってすでに指摘されているが、Nash は13世紀末期においてこの問題をめぐって行われた論争を年代的に順を追って叙述しているので、われわれはこれによって1275年から1301年に至る論争の経過を知ることができる。しかし26年に及ぶ論争の結果エギディウスの立場はなんら変わるどころがなかった。エギディウスの立場では、神学は *speculativa* でも *practiva* でもなく、*affectiva* であり、その subject は *special aspect* の下における神、すなわち *beatifier*, *glorifier* としての神であって、無限としての神ではない。アンリー・ドゥ・ガンは、神学が *affectiva* であるという点について、*affectio* は *speculatio* に伴うものであって *scientia* の外にあると反駁し (*Summae Quaestionum Ordinariam*, a.8, q.3), ゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテースは、神学が *affectiva* であるとする、*scientia moralis* にすぎなくなると反論した (*Quodlibet* IX,2)。神学が *special aspect* における神を対象とするという点についてはアンリー・ドゥ・ガンが *Quodlibet* XII, q.1で、ゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテースが *Quodlibet* I,5 でこれを反駁している。神学の目的は至福であり、至福は愛の問題である。したがってこの目的に関係のないものは神学から排除される。至福は意志の働きにより、神との最高の一致は愛によるとエギディウスは主張したが、ゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテースは、*Quodlibet* XI, 1; XIII, 1; XIV,2 で愛の優位を攻撃している。エギディウスは、知性があるがままの神を知り得るということ認めようとせず、福者は完全に神を認識できないが、しかしかれ

らが知らない神の部分はないというトマスの考えを受け入れない。意志のみが愛によって神に到達することができるのである。したがって Nash によるとエギディウスは、その経歴から予想されるごとく、(1) special aspect における神が神学の subject である。(2)愛による一致の優位、という全くアウグスティヌスの教説を主張した。

II

形相多数性の問題は13世紀を通じて哲学の重要な問題であり、これについて Hocedez の Richard de Middleton に若干触れられているが、戦後 R. Zavalloni が出した Richard de Middleton に関する研究書⁽¹⁰⁾によってこの問題をめぐる論争の実体を知ることができる。

周知のごとく、実体的形相の多数性の問題においてエギディウスに思想の変化があったことは諸家が一致して認めるところである。エギディウスの著作年代は現在のところまだ暫定的であるが、初期の著作である *Errores philosophorum* (1270) において形相単一説は誤謬とされているが、*Contra gradus et pluralitatem formarum* または *De gradibus formarum* または *De pluralitate formarum* (1277-78) では全く反対に形相多数説はキリスト教の信仰に反するとして否定されている。このため一時 *Errores philosophorum* のエギディウスへの attribution が問題になったが、J. Koch, G. Bruni の研究以来、この両書の矛盾は思想の発展によって説明されている。年代的にこの両書の間におかれる著作についてエギディウスの態度をみると、*In libros physicorum* (1272) では質料的存在において形相の単一性を認めているが、人間については躊躇している。*In de anima* (1273) においても態度は変わらず、人間における実体形相の単一性の問題を決定しようとはしない。しかし *Theoremata de corpore Christi* (1275-76) では *Eucharistia* について論ずる際、この問題に言及せざるをえなくなり、形相単一説が最も probable であり、*Eucharistia* の教義におい

て生ずる困難をより容易に解決しようと主張した。そして *Contra gradus* (1277-78) において、先に述べたごとく、形相多数説はキリスト教の信仰に反すると断言しているのである。したがってエギディウスは最初アウグスティニアンであり、徐々に、おそらくトマスの講義に出席した (1269-72) ことなども手伝って、トマス派の形相単一説に達したことになる。

しかし *Contra gradus* 以後再び形相単一説を弁護する語調が変化してくる。*Contra gradus* の直後に書かれた *Theoremata de esse et essentia* (1277-78) に、形相の多数性は *esse simpliciter* の多数性の原因であるかという *Theorema* がみられるが、そこでエギディウスはすでに形相単一性について言葉を濁しているのである。これについて Hocedez は 1277 年の *condamnation* の結果を顧慮したのでであると註解している。さらに *Quodlibet I q. 14* (1285) でも、かつて形相単一性を断乎として主張した際の調子はみられず、形相多数性を認めるとしても、*anima* の多数性を認める必要はないという言い方をしている。このような態度の変化はなぜ生じたのか。

エギディウスがパリ大学に復帰するについて形相単一説を撤回する必要があったことが史家によって言われている。このため、かつて *Contra gradus* についての概説書を著わした J. Makaay は、エギディウスの態度の変更が学問上の確信の結果ではなく、パリ大学に教授の席が待っているにもかかわらずエギディウスがパリから遠ざけられていることはアウグスティノ隠修士会にとって痛手であったため、表面上意見を変更したのでであると主張した。⁽¹¹⁾

従来エギディウスは *Contra gradus* で形相単一性を擁護したため 1277 年の *condamnation* に含まれ、パリ大学から追放され、今後人間における形相単一説を教授しないように指令されたと言われてきたが、R. Zavalloni はこの見解に疑問を提出している。Zavalloni によれば、これは H. Denifle⁽¹²⁾ によって提出され、Mandonnet⁽¹³⁾ によって弁護された仮説である。も

しこの仮設を認めるとすれば、たとえば Aegidius de Lessines は 1277年の *condamnation* の後、どうして *De unitate formae* (1278) を著わすことができたのか、またゴドゥフロワ・ドゥ・フォンテヌは どうして 1285 年以後、トマス説が最も *probable* であるとして弁護することができたのかという疑問に答えることができない。一体、形相単一説は 1277 年の公式の *condamnation* の対象であったろうか。疑いもなく形相単一説はパリ大学の多くの教授によって否定されたが、しかしこの非難は教会自身の権威によって行われたものではなかった。神学者側からの非難はすでに 1270 年に表明されているが、これは *Contra gradus* にかなり先立っている。したがってエギディウスの思想の変化が 1277 年の *condamnation* によると主張することはできない。もちろん *influence morale* が全くなかったわけではない。Zavalloni は以上のようにのべて、*Contra gradus* 以後のエギディウスの態度が真実のものか、用意周到さから出たものかについて確実な答えを与えることはできないと結論している。

とにかく *Theoremata de esse et essentia* においてすでに形相単一説に対して曖昧な態度を取っているのであるから、1277 年の *condamnation*、パリ大学からの追放がエギディウスに影響したことは事実であり、1285 年パリ大学復帰に際して急に自己の説を撤回したわけでもないであろう。後年のエギディウスの経歴からみると、周囲からの圧迫を受けて用心深い態度を取ったというのが真相だと思われる。

III

esse と *essentia* の実在的区別の問題をめぐる論争においてエギディウスが重要な地位を占めていたことは Hocedez の研究によって明らかである。⁽¹⁴⁾ Hocedez は特に *Theoremata de esse et essentia* についてトマスとの相異点を指摘したが、それによるとエギディウスはトマスにおける *esse* と *essentia* の実在的区別を誇張している。すなわちエギディウスは *esse*

と *essentia* は実在的に異なる二つの *res* であり、両者は分離される (*separatur*) と主張したが、Hocedez はこの *res* をあたかも存在者であるかのごとく解釈し、エギディウスの説には *ultra-realisme* の傾向があることを指摘し、エギディウスは実在的区別の *physique* な *matériel* な解釈をして、トマスにおける実在的区別の形而上学的意味を理解しなかったと述べている。

P. Nash は、ボエチウスの命題 *Diversum est esse et id quod est: ipsum esse nondum est. At vero id quod, est, accepta essendi forma, est atque consistit* について *Quaestiones disputate de esse et essentia* (1285—1287) q. 9, q. 12 及び *In I Sent* (1275—1277) d. 8 で展開された解釈を通じて、エギディウスの思想を検討している。⁽¹⁵⁾ Nash はエギディウスにおける新プラトン派の影響を強調して、エギディウスは、トマスがこの時代に広く受け入れられたのでもなく、理解もされなかったという事実の証人であるとまで極言している。

Hocedez のエギディウス解釈は現在通説となっていて、E. Gilson,⁽¹⁶⁾ F. Copleston,⁽¹⁷⁾ G. Leff⁽¹⁸⁾ 等の哲学史家はいずれも Hocedez 説をそのまま受け入れているが、筆者は Hocedez 説に疑問を感じたので、他の箇所⁽¹⁹⁾で *Theoremata de esse et essentia* を検討し、Hocedez のエギディウス解釈の誤謬を指摘した。要するにエギディウスは用語の上でトマスが使用しなかった *res, separatur* 等を使用しているけれども、内容的には *Theoremata de esse et essentia* はトマス的と言えるのである。

P. Nash の研究も Hocedez の示唆に基づくものである以上、やはり疑問とすべき箇所がかなりみられる。しかし Nash が使用しているエギディウスの著作のうち、*In I Sententiarum* のマイクロフィルムは日本に来ていないので、Nash 説を全面的に吟味することができないのは残念である。ここでは紙数の関係もあるので、*Quaestiones disputate de esse et essentia* (Venetiis 1503) の q. 9, q. 12 に基づいて Nash 説の根本的な主張

についての若干問題点を指摘したいと思う。

Nash によると、esse は本来的に在るとは云えず、それによってあるものが在るところのものであるという点でトマスとエギディウスは一致しているが、これは言葉の上の一致にすぎない。トマスもエギディウスもアヴィチェンナに多くを負っているが、エギディウスは専心アヴィチェンナを受け入れた。すなわち esse と essentia の相異は、esse が real に accidental であるがゆえに、real なのであり、esse は偶性的形相と同様に accidental である。さらにトマスもエギディウスも esse を actus として把握しているが、これも言葉の上の一致にすぎない。すなわちエギディウスにおける esse は essentia の ordo における第二の actus にすぎない。esse と essentia は二つの res であるが、essentia が優位を占め、それ自体 actus であって、esse はこれに付け加わり、多数化するところの第二次的 actus にすぎない、要するに hylemorphist と同様、エギディウスにおける actus—potentia は形相・質料のごとく本質の ordo において異なると考えられているのであって、あたかも actus—potentia に相応する esse と essentia も本質同一の実在面で考えられた二つの res であるというのが Nash の説である。

さて q. 9. utrum essentia creaturae sit suum esse vel realiter differat ab esse ejus, q. 12. utrum creatura posset annihilari sinon differet in ea realiter essentia et esse. はいずれもアンリー・ドゥ・ガンに対して反論している箇所であるが、筆者のみるところでは基本的な考え方において Th eoremata de esse et essentia となんら異なるところはない。ただ後者にみられぬ論証が付け加わえられており、新しい点と言えは esse が accidens であるという主張と、アンリー・ドゥ・ガンの説すなわち esse と essentia の distinctio について secundum rem と secundum rationem の区別の中間的区別としての secundum intentionem の区別を拒否していることである。

まず *esse* と *essentia* が同じ *ordo* にあって、しかも *essentia* は *actus* であって優位を占め、*esse* は偶性的形相のごとくこれに付け加わる第二の *actus* にすぎないという解釈は、本質の *ordo* と存在の *ordo* の混同から生じたのであるが、エギディウスの原文から *essentia* の優位を論ずることは不可能である。*essentia* が *quaedam actualitas* であることは *Theoremata de esse et essentia* でも強調されているが、これは本質構成原理としての *actus* を意味するのであって、本来の意味での *actus* ではない。*essentia* が存在の *ordo* に関してはあくまでも *potentia* であり、*primum agens* によって *esse* を付与されない限り、実在界に *existere* しえないことは q. 9, q. 12 でエギディウスがくり返し主張するところである。

……*quia essentia cujuslibet creaturae de se non habet quod actu sit, oportet quod ei superaddatur actualitas aliqua quam vocamus esse* ……*ei (essentia) ab agente datur esse per quod actu existit et est actu in rerum natura* (q.9, fol. 19va).

本質の *ordo* と存在の *ordo* の区別はエギディウスでは全く明瞭であって、決して混同されていないことは、たとえば *forma separata* が *creabilis*, *annihilabilis* ではあっても、*generabilis*, *corruptibilis* ではないという表現からも看取される。前者は *esse* と *essentia* の合成に関して、後者は本質構成原理に関して使用されており、*forma separata* は本質の *ordo* において *potentia* を含まないにしても、存在の *ordo* に関しては依然として *potentia* であることを表わしている。したがって明らかに *esse* が優位を占めているのである。q. 9 では *esse* は *secundus actus* ではなく、*primus actus* であるという表現がみられる (fol. 21rb)。

それにもかかわらず *esse* と *essentia* が同一の *ordo* における二つの *res* であって、*essentia* が優位を占めると解されるのは、*esse* が *essentia* に付け加えられる (*superadditur*) という表現と、*esse* は *accidens* であるという命題が種々の意味で受け取れるからである。*essentia superadditur*

esse という表現は *Theoremata de esse et essentia* でもしばしばみられるが、先にも述べたごとく、esse が *accidens* であるというのは新しい表現である。しかし果して *accidens* とは偶性的形相のごとき意味で言われているであろうか。

Ipsium esse quodam modo terminatur essentiam in quantum facit eam actu existere, esse ergo est in genere substantiae. …… Si ergo queras in quo genere est esse, est in genere substantiae. Sed si queras quomodo genere habet esse in tali genere, diceretur quod non est in tali genere per se, nec est in genere substantiae tamquam substantia, sed est in genere substantiae tamquam actus essentiae. …… Res ergo ipsa quae est esse est in genere substantiae, habet tamen ipsum esse quemdam modum accidentalem actualem in quantum est superadditum substantiae (fol. 20vb).
 esse それ自体はいかなる *genus* にも属さないが、*essentia* に受け取られた esse は *genus substantiae* に決定されている。しかし esse が *substantia* だからではなく、*actus substantiae* だからである。ここで …… *quemdam modum accidentalem aliquam* という表現に注意すべきであろう。q. 12では、esse が *essentia* でないとすれば実体であるか偶性であるかのいずれかであるが、両者の中間 (*neutrum*) はないというアンリー・ドゥ・ガンの異論に対して、…… *illud esse, licet non sit substantia, est tamen in genere substantiae non directe sed sicut actus et principium (fol. 28rb)* と言われており、これに続いて esse は *substantia* でもなく、本来的に *accidens* でもないが、*actualitas* として *essentia* を通じて *substantia* の範疇にあると述べられている。ここでは明白に esse は *accidens* でないと主張されているわけである。

q. 9で、esse が *essentia* の *additum* であれば、*essentia* の *accidens* であり、*accidentia* の範疇に属することになるが、これは不合理であるという異論に対して次のように答えられている。esse は *additum* であるが、しか

し *essentia* と同じ *genus* にある。…… *ipsa essentia substantiae est in genere substantiae, esse substantiae est accidens, sed est in genere substantiae.* (fol. 22rb) ここで *esse* が *accidens* であるという意味は、先に引用した箇所と関連させて考えれば、*esse* が偶性的形相の意味で *accidens* であるということではなく、*essentia* にとって *esse* が *accidens* であるということである。トマスにおけるごとく ⁽²⁰⁾ *accidens* とは *ens contingens* を意味するのであって、*praedicamenta* として *accidens* ではない。エギディウスの用語で云えば、*essentia* は *esse* を獲得し、失うものである。すなわち *incipere et desinere esse* であって、*esse* は *creatura* に *proprie* には属さず、*accidentaliter* に属すという意味であろう。もし *proprie* に属すとすれば、*essentia* は *suum esse* となり、*creatura* は *creabilis* でも *annihilabilis* でもなくなる。それゆえに先に引用した箇所でも……*quemdam modum accidentalem habet* と云われたのであるが、この表現は *In II Sent. d.I, a.26* にもみられる。

esse が *essentia* に付け加わるという表現は、あたかも両者が独立的に存在するものであるかのように受け取られがちである。また *esse* は *essentia* から分離される (*separatur*) という言い方も、*esse* が *essentia* から分離されてもなお両者は自存するという意味に誤解されている。しかしこれは全く実在的区別そのものの歪曲を意味する。*esse* と *essentia* を *actus-potentia* とする考えは *creatio* の問題と結びつけてはじめて意味を持つのであって、エギディウスが実在的区別を主張したのは要するに *creatio* の可能性、*creatura* の有限性、多様性を説明するためであった。

esse と *essentia* が別のものであり、*esse* が *essentia* に受け取られるとすれば、*esse* が受容される *essentia presupposita* なしには *creatura* は創造されないことになり、*creatio* の概念に反するという異論に対しても、また *creatio* は *esse* に関係するが、もし *esse* と *essentia* が別のものであるとすれば、*essentia* は *per accidens* に創造されることになり、二つ

の *creatio* があることになるという異論に対しても、エギディウスは *esse* と *essentia* の合成体が同時に創造されるのであって、*creatio* においてはいかなる意味でも *essentia* は時間的に *esse* に先行しないと答えている (fol. 22ra. 28va)。こういう異論が挙げられているところをみると、Hocedez, Nash ならずとも当時すでに、*esse* と *essentia* は分離されてなお存在するという意味に誤解される危険があったわけである。

エギディウスの影響を受けたトマス・スットンは、エギディウスが *essentia* を *possibile esse* としたことを非難して、*essentia* が *possibilis* であって、創造によってこれに *actus* としての *esse* が刻印されるとすれば、無からの創造ではなくなると批判しているが、これは原理として想定された *potentia* を存在の *ordo* において積極性を持つものと考えたところから生じた誤解である。

essentia が *potentia* であると言われる場合の *essentia* はそれ自体 (*de se*) として抽象的に考察された *essentia* であり、*creatura* の多様性を説明するために想定されたものであって、その限りイデアとして *creator* の中に存在することはあっても、*creatura* としては可能的にすら存在しない。けだし *creatio* は無からの創造を意味しなくてはならないからである。*essentia* とは存在の *ordo* においては全く消極的な *potentia* であっても、本質的に制約する原理としてはむしろ積極的に想定されたのであると言える。*esse* と *essentia* とは同時に創造されたのであり、両者の *separatio* とは *creatura* の *destructio* を意味するのである (fol. 30 va)。

最後にエギディウスにおける *universal hylemorphism* の問題について一言する。エギディウスは *forma separata* における形相質料の合成を拒否し、*forma* と *esse* の合成を主張している。…… *cogimur etiam in substantiis separatiis ponere compositionem ex potentia et actu, non possumus eam ex materia et forma, sed ex esse et forma* (q. 9, fol. 19rb). *In substantiis separatiis est compositio ex forma et esse vel ex essentia*

et esse (fol. 20vb)

しかし、Nash によると、エギデウイスは *forma separata* における形相質料の合成を否定しているにもかかわらず、すべての *creatura* に *formal and material element* を見出したので *universal hylemorphist* とあまり異ならない。Nash は典拠として、*In liber de causis*, prop. 26から次のような文を引用し、エギデウイスを *essentialist, universal hylemorphist* ときめつけている。Est ergo omne causatum compositum ex potentia et actu realiter differentibus, sive hnjusmodi potentiam et actum appellemus essentiam et esse, sive materiam et formam, sive formam et esse, essentiam et actum ejus, sive quocumque alio nomine ea nominemus.

エギディウスは、q. 12 で *liber de causis*, prop. 9 の *Intelligentia habet hyleachim et formam* という命題は *esse* と *forma* の合成と解すべきであると述べているが、その際形相に対する質料の *potentia* と、*esse* に対する形相の *potentia* とを利用して巧妙に論じている。この箇所から、すべての *potentia* を *materia* と呼ぶなら、*Immaterialia* に *forma—materia* があると認めうるというトマスの表現 (*Quodlibet. IX. De spirit. creatris. a.1*) が想起されよう。エギディウスは *Quodlibet I, q. 8, (1285)* では *universal hylemorphism* と自分の立場との相異は言葉の問題にすぎないと言っている。Et hoc forte volunt illi qui in angelis materiam ponunt, cum ipsi dicant materiam illam non esse ejusdem rationis cum materia corporatum, solum ergo in verbis videtur discordare a nobis. この箇所について Hocedez は、周囲からの反対があまりに激しかったのでこのような言い方をしたのでと解説している。

いずれにしても以上挙げた箇所からは形相多数性の問題の場合と同様、果してエギディウスが学問的確信から意見を変更したのか、それともアウグスティノ隠修士会を代表する教授として巧みに体をかかわしているのかは断定できないが、q. 9. q. 12. の論調及び *Theoremata de esse et essentia*

における universal hylemorphism を拒否する断乎たる態度から推すと、後の場合の方が事実に近いと思われる。Nash は Theoremata de esse et essentia をもエギ ディウスの essentialism を示すものとして扱っているが、これは曲解も甚だしいと言わざるをえない。たとえエギディウスがパリ大学教授時代に universal hylemorphism を主張したと仮定しても、Theoremata de esse et essentia で Intelligentia における形相質料の合成を拒否したことについては全く疑いの余地がないからである。

以上述べたごとく Nash 説には問題とすべきところが多いのであるが、エギディウス研究においてはパリ大学教授時代の著作について特に慎重な態度が必要のように思われる。

なお実在的区別の問題について G. Suárez の「esencia と existencia の⁽²²⁾区別をめぐるエギディウス・ロマヌスの思想」という論文があり、Nash によると著作年代に関して Bruni の見解を若干訂正しているというので是非参照したかったが、残念ながら本稿執筆までに入手できなかった。

註

- (1) P. Mandonnet ; La carrière scolaire de Gilles de Rome (Revue Science philosophiques et théologiques 1910, p. 480—499)
- (2) E. Hocedez ; Gilles de Rome et saint Thomas. (Mélanges Mandonnet I, 1930, p. 385—409)
E. Hocedez ; Aegidii Romani Theoremata de Esse et Essentia, 1930. introduction. p. 1—117
- (3) G. Bruni ; Egidio Romano Antiaverroista (Sophia, I 1933, p. 208—219)
- (4) J. Koch ; Giles of Rome, Errores Philosophorum 1944, Introduction. LVI
- (5) P. Nash ; Giles of Rome, Auditor and Critic of St. Thomas. (The modern Schoolman. 1950, p. 1—20)
P. Nash ; Giles of Rome on Boethius' "Diversum est esse et quod est" (Mediaeval Studies, 1950, p. 57—91)
- (6) E. Hocedez ; Gilles de Rome et Henri de Gand (Gregorianum, 1927,

p.385--384)

J. Paulus ; Les disputes d' Henri de Gand et de Gilles de Rome sur la distinction de l'essence et de l'existence. (Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge. (1940-42, p. 328-358)

なお註(2) (5)参照

(7) S. Makaay ; Der Traktat des Aegidius Romanus über die Einzigkeit der substantiellen Form. 1924

E. Hocedez ; Richard de Middleton. 1925. p. 459-477

R. Zavalloni ; Rihard de Mediavilla, et la controverse sur la pluralite des formes, 1951. p. 250-252, 259-261, 278-282, 489-491.

(8) P. Nash ; Giles of Rome and the Subject of Theology (Mediaeval Studies, 1956, p. 61-92)

(9), (10) 註(7)参照

(11) S. Makaay ; op. cit. S. 182-183.

(12) H. Denifle ; Chart. Univ. Paris., t. II, p. 634

(13) 註(1)参照 (14) 註(2)参照 (15) 註(5)参照

(16) E. Gilson ; History of Christian Philosophy in the Middle Ages. 1955.
p. 420-423, 735-737

(17) F. Copleston ; A History of Philosophy. vol. II, 1952. p. 469-465

(18) G. Leff ; Medieval Thought. 1958. P.223-245

(19) 拙稿 ; エギディウス・ロマヌスにおける esse とessentia (「哲学」第40集, 慶応大学三田哲学会編 1961)

(20) Esse autem est illud quod est magis intimum cuilibet, et quod profundius omnibus inest ; cum sit formale respectu omnium quae in re sunt. (S. Th., I, q. 8, a. 1.)

J. Owens ; The Accidental and Essential Character of Being in the Doctrine of St. Thomas Aquin. (Mediaeval Studies, 1958. p. 1-40)参照

(21) F. Pelster ; Thomae de Sutton, Quaestiones de reali distinctione inter essentiam et esse. 1929. S.56-57

(22) P. G. Suárez ; El pensamiento de Egidio Romano en torno a la distincion de esencia y existencia. (La Ciencia Tomista. 1948. No. 229-230)